

飯田市議会 総務委員会 所管事務調査（視察）報告

第1 調査実施期日

令和8年7月6日（月）～7日（火）

第2 調査事項

番号	視察項目	視察先
1	まわり続けるリサイクル事業について	兵庫県 神戸市
2	かめおかプラスチックごみゼロ宣言について	京都府 亀岡市
3	Circular Kameoka Lab （サーキュラーかめおかラボ）	京都府 亀岡市

第3 参加者

総務委員長	福澤 克憲
総務副委員長	市瀬 芳明
総務委員	岡本 恒和
総務委員	岡村 弘子
総務委員	片町 元彦
総務委員	佐々木 博子
総務委員	関島 百合
総務委員	清水 優一郎

第4 調査概要（視察報告）

1 まわり続けるリサイクル事業について

（兵庫県 神戸市）

【文責：関島委員】

(1) 調査概要

ア 日時 7月6日(月) 13:30～15:30

イ 場所 コミスタこうべ／エコノバあづま（現地視察）

ウ 説明者 神戸市 環境局 資源循環課 課長 井関 和人

係長 中崎 友輔 、小原 拓万

エ 視察の目的・視点

- ・事業開始の経過
- ・地域拠点「エコノバ(資源回収ステーション)」の取り組みの概要
- ・資源循環による地域コミュニティの活性化
- ・官民連携による取り組み
- ・これまでの成果や課題、今後の体制、取り組みについて ほか

(2) 調査報告（調査内容）

- ・「容器包装リサイクル法」の制定により、一般廃棄物のうち約60%の容量を占める容器包装廃棄物の処理が課題となった。こうした中で神戸市では、容器包装プラスチックを一括ではなく、種類ごとに分別した回収・資源化に取り組んでいる。
- ・同じプラスチックにリサイクルするのは、「ポリエチレン（キャップ・レジ袋など）」「ポリスチレン（食品トレイ・乳酸菌飲料の容器など）」「ポリエチレンテレフタレート（ペットボトル・透明容器など）」「ポリプロピレン（豆腐の容器・冷凍食品のトレイなど）」の分別が必要。
- ・神戸市が設置を進める「エコノバ（資源回収ステーション）」は、①質の高いリサイクルを目指してプラスチック資源を回収する拠点 ②誰もが関わるごみ出しをきっかけに、訪れた人たちが交流する場となる、の2点を目的に、2021年11月にスタート。2026年6月現在で74カ所設置され、今後の設置目標は、163ある小学校区にそれぞれ1～2カ所の計約200カ所。地域交流センターなどの空きスペースを利用して設置している。
- ・「エコノバ」の回収ボックスは、設置するスペースに合わせ臨機応変に設置。視察で訪れた施設は廃校になった小学校で、他の施設と比べると回収ボックスの内容が充実していた。「エコノバ」の設置数の伸びと合わせて資源回収量も伸びており、成果が確認できた。

- ・また、「エコノバ」の回収ボックスを利用するようになってから、地域活動への関心が高まったとアンケートで回答する人も増え、「自社の容器を回収したい」と申し出る企業も増えた。
- ・小売り・メーカーなど企業との連携も活発で、ライバル同士が連携する例も。歯ブラシは定規に、ペットボトルのキャップはブルーシートなどにリサイクルされているが、乳酸菌飲料の容器は乳酸菌飲料の容器に再資源化する「水平リサイクル」（元の製品と同じ種類の製品にリサイクルする手法）に取り組もうとしている企業が複数あることも分かった。
- ・環境省の「自動車向け再生プラスチック市場構築アクション」によると、自動車の内装部品は、再生プラスチックの配合率を高めないと今後は輸出ができなくなるため、家庭から集めた「ポリプロピレン」で実験中という説明や、使い捨てカイロの回収を小林製薬と連携して取り組み、全てのメーカーのカイロを対象に、鉄砂を再利用する試みを実証中との説明もあった。
- ・1人暮らしの高齢者にごみを持参してもらい、訪れた人たちと新たな交流が生まれる「コミュニティの拠点」にしていくねらいもあり、「ゴミ出しが楽になった」「外出する機会が増えた」「人がいるところに行くと楽しくなる」といった利用者の声などが紹介された。衣料のリユースや駄菓子コーナーが設置されたエコノバもあるほか、全ての休憩スペースでネスレ日本が無料でコーヒーを提供しており、官民連携による取り組みが展開されている。
- ・このように、エコノバはプラスチックリサイクルの推進だけではなく、資源を持ち込むことから始まる社会的な行動と、エコ活動への意識の醸成を足掛かりに、人々が集う地域交流の場となることが期待されている。

(3) 主な質疑応答

Q エコノバの利点は。

A 市民が参加しやすく、入りやすいところ。

Q エコノバでゴミ出しができなかったら、どうなるのか。

A 各地域で集団回収も行っているので、エコノバは＋α。エコノバ以外でも分別して出すことができる。

Q 地元が担う役割は。

A 163の小学校区ごとに、婦人会やこども会、自治会などの地縁団体が構成する「ふれあいのまちづくり協議会」があり、同協議会が指定管理を受けて地域交流センターを運営している。これに合わせ、エコノバも「ふれあいのまちづくり協議会」が管理している。しかし、高齢化が進んで施設管理ができない地域が出始めてきた。そうした地域では地域交流センターの運営を公募し、NPOが管理するようになってきた。

Q エコノバで、人々の交流も期待するのはなぜか。

A 阪神淡路大震災で、仮設住宅で生ごみの液肥を利用することでコミュニティが生まれた。このため、ごみ出しとコミュニティはつながりがあると考えている。

Q 課題は。

A 地域交流センターにスペースがないこと。このため、空き家や商業施設にもエコノバが設置できないかアンテナを張っている。スペースの関係から、エコノバごとに回収の内容が異なるので、統一的な周知が難しい。佐川急便が回収しているが、エコノバの数が増えると回収作業が大変になる。

Q 企業の反応は。

A 小林製菓は「まずは神戸でやる」と言ってくれている。大手企業の中には「自分たちが負担してでもやりたい」と言っている企業もある。

Q エコノバでの回収量は。

A 令和6年度に回収した容器包装プラスチックは約8,500トン。このうち、エコノバで回収した量は約7トン。

Q カイロを回収した実績は。

A 2025年2月～5月で3.3トン。

(4) まとめ・考察

- ・「地域のコーディネーター役として、地域の資源循環システムを構築するのが地方公共団体の役割」という文言が資料にあり、それだけの覚悟と使命を持って、「まわり続けるリサイクル事業」に神戸市が取り組んでいることを感じた。
- ・連携に理解を示し、神戸市と一緒に取組もうとしている企業が複数あり、そこまで持っていた職員の方の熱意と気概を感じた。
- ・神戸市でも廃校になる小学校があり、高齢化が進み、地域運営に支障が出始めているが、知恵と工夫で乗り切ろうとしていることが分かった。

(5) 各委員の所感

ア 良かった点

委員名	内容
岡本 恒和	・プラスチック資源の使い捨てでない「水平リサイクル」に挑戦し続けている。 ・市民、企業、行政が役割分担して神戸市全体で意識醸成ができていて、将来はもっと進んだ取組になっていく可能性が感じられる。 ・大手民間企業が積極的に協力していることは大きい。 ・「エコノバ」に市民が都合の良い時に持ち込める便利さ。 ・「エコノバ」での各資源がよく見える工夫、義務感を与えないような「楽しさ」が感じられる表現や空間利用が工夫されている。

	・「エコノバ」が交流の拠点にもなっている点。
岡村 弘子	・エコノバ「資源回収ステーション」が①質の高いリサイクルを目指してプラスチック資源等を回収し「回り続けるリサイクル」を実践する拠点②誰もが関わる「ごみ出し」をきっかけに地域交流が生まれるコミュニティ拠点という目的二つを兼ね備えたものであることを理解することが出来た。 ・回収することを楽しいと思わせる空間に作り上げており、オーダーメイドの回収ボックスや「見える化」への配慮など市民の環境に対する意欲を高める取り組みであると理解した。 ・163の小学校区の空き教室や地域交流センターの空きスペースの使用は、小学生から高齢者までが居場所として過ごす目的に好条件であることを再確認できた。 ・多様なプラスチックリサイクルの開発のみに収まることなく、紙容器やカイロまで実証実験を重ねており、リサイクルに対する先進的な取組に感心した。 ・飯田市で取り組んでいるリサイクルステーションのペットボトルや瓶回収は市民の皆さんの協力で成り立っている事、生活の中に環境を考えて頂く取り組みがある事を改めて実感し感謝していきたいと思った。
片町 元彦	・行政主導ではなく企業等の民間主体が、地域に根差した資源回収拠点「エコノバ」を運営する官民連携モデルが確立されている。 ・単なるごみ収集ではなく「地域交流拠点」として機能させ、住民の参加意欲やリサイクルへの当事者意識を高めている。 ・プラスチック等を「捨てるもの」ではなく「資源」として再定義し、持続可能な循環の仕組みを事業として構築している。
佐々木 博子	・エコノバの回収ボックスがとてもかわいらしかった。リサイクル品の回収というと、機能性や管理のし易さが重要視されて無愛想な雰囲気になりがちだけれども、統一感のある木製の棚や黒板のようなポップでわかりやすく分類と説明がされており、おもわず「私も入れたい」と大人も子どもも楽しんで参加できる雰囲気づくりが良かった。
市瀬 芳明	・エコノバではプラスチックの種類を正確に分けるため、ペットボトルキャップ、詰め替えパック、豆腐の容器といった具体的な「品目」を指定して回収している。これらは連携企業の技術によって、適切なリサイクルや、そのための研究開発に活用されている。 ・「地域交流」の取り組みでは、資源の持ち込みを介して新たな交流が生まれるコミュニティの場となっており、ネスレ日本にご協力いただき、無料でコーヒーを楽しめ、市民の皆様がコーヒーを片手に談笑されている。運営管理者からは「子どもから大人まで世代を超えた交流が生まれた」という報告があり、利用者の方々からも「ゴミ出しが楽しくなった」「外出の機会が増えた」「人がいる場所に来ると元気がもらえる」といった嬉しい声が出ている。 ・利用者アンケートでも、「外出する機会が増えた」「人と会う機会が増えた」といった回答に加え、「ゴミや環境への関心が高まった」「地域活動に関心を持つようになった」という前向きな変化が見

	られている。
関島 百合	・「ポリエチレン」「ポリプロピレン」など、プラスチック資源を細分化して、「これは最終的に何に生まれ変わる」ことを市民にそれぞれ示しながら回収する仕組みの構築。 ・「自社の容器を回収したい」という企業が増えた点。「エコノバ」が、企業の意識も変えている。 ・回収した「ポリプロピレン」を使い、自動車部品へのリサイクルを目指して実験中とのことで、神戸市は日本を代表する自動車産業ともリサイクルの分野で関わろうとしている。 ・外出する機会が減った高齢者が足を運ぶ場にもなっていて、新たな地域交流の場も視野に入れている。
福澤 克憲	・小学校区ごとに設置されているエコノバ（資源回収ステーション）の取り組み、容器包装リサイクルを更に細分化した取り組みを学ぶことができた。 ・細分化するため連携している具体的な企業名、今後需要が生まれそうな産業分野等を学ぶことができた。 ・エコノバを「地域交流」としても機能させている事例を学ぶことができた。
清水 優一郎	・市民が利用しやすい場所に回収ステーションを設置し、気軽に資源を持ち込める仕組みとなっている。行政回収を補完し、市民が無理なくリサイクルに参加できる環境が整えられている。 ・資源を持ち寄るという環境活動をきっかけに、市民同士が自然に交流できる場となっている点が特徴的である。単なる資源回収拠点ではなく、地域のつながりづくりや環境意識の醸成にも寄与している。

イ 参考となりそうな点

委員名	内容
岡本 恒和	・まちの役員の負担なく運営されている。指定管理者によって課題はあるとのことでしたが、役員負担の軽減を考えていく上でこのような手法も参考になる。 ・「エコノバ」のような地域コミュニティとリサイクル拠点を兼ねた施設は、空き家活用や廃校活用の参考になる。
岡村 弘子	・リサイクルは企業の皆さんと繋がる事が仕組み作りとして重要である。 ・わかりにくい回収品目を分かりやすく表示する事や再資源後の品目を表示するなど市民目線で取り組みを展開する重要性。 ・「ごみ出し」をきっかけに地域交流が生まれるコミュニティ拠点という発想を取り入れて、ゴミ出しを義務と思わせないソフトな取組に置き変えていく事。 ・市民の困りごと解消につなげる施策であることが、市民の意欲向上につながる事。 ・エコハウスの中のリサイクル事業部門を拡大できるのではないかな。
片町 元彦	・既存のごみステーションや資源回収拠点を、単なる収集場所から「地域コミュニティの拠点」へ機能転換できる可能性がある。

	・中山間地域を多く抱える飯田市において、資源回収を住民同士の交流の場として設計することは、見守りや孤立防止にもつながる。 ・官民連携による運営モデルは、財政負担を抑えつつ環境文化都市としての取り組みを継続する手法として参考になる。
佐々木 博子	・衣類の回収。特に子ども用服のリサイクル。よくあるのはバザーだが金銭のやり取りや値付けなど、案外手間がかかる。子ども服やおもちゃのリサイクルは子育て世代にニーズがあるのではないかな。
市瀬 芳明	・めぐるカイロプロジェクトの様な活動 一括回収は便利で量も集まるが、どうしても異なる素材が混ざるため、最終的に物流パレットなどの「質の低いリサイクル（ダウンサイクル）」になりがち。飯田市でも、既存のリサイクルセンターの一部を利用して、ペットボトルのキャップ、詰め替えパックなど「特定の品目」だけを綺麗に集める専用ボックスを設けることで、同じ容器に生まれ変わらせる「水平リサイクル」を補完する仕組みが作れるかも。 ・企業連携のプラットフォーム化 「自社の容器を回収してリサイクルしたい」と考えているグローバル企業やメーカーは増えているようだが、回収のインフラを持たずに困っているとのこと。飯田市でおこなっているリサイクルステーションが、もし「品目ごとの綺麗な分別」と「地域住民の確実な参加」を担保できる場所になれば、企業との協働プロジェクトを生み出すプラットフォームになる可能性があるのではないかな。 ・「ゴミ出し」を地域の居場所（社会的処方）に変換 特徴的なのは、リサイクル拠点を地域交流の場（コミュニティ拠点）として再定義している点。 単なる「ゴミを捨てる場所」ではなく、「行けば誰かに会える、会話が生まれる場所」として付加価値をつけるアプローチは、飯田市の自治振興センター、ムトスプラザ、図書館などを地域のウェルビーイング（社会的処方）に直結させるヒントになるかも。
関島 百合	・「ごみ箱に見えたら終わり」という説明に納得。「ごみを捨てに行く」のではなく、「地球環境に自分は貢献している」といった満足感と、しゃれた雰囲気、「エコノバ」を行ってみたいくなる場所にしている。
福澤 克憲	・容器包装プラスチックの細分化リサイクルについては、行政からの協力要請ではなく、企業からの声掛けにより成立していることを学んだ。その中で、自動車に使用されるプラスチック部品のリサイクルについては、飯田市においても取り組める可能性を感じ、参考になった。（内閣府戦略的イノベーション創造プログラム第3期） ・エコノバの収集については、ごみ収集業者ではなく、輸送業者（佐川急便）に委託しており、そうした手法も可能であることを学び、参考になった。 ・エコノバについては、小学校区ごとに設置されている「地域交流

	センター」を拠点に 74 カ所で運営されており、大きな施設 4 カ所以外は「ふれあいのまちづくり協議会」に指定管理していることを学んだ。仮に飯田市での事業展開を考えた場合、各地区自治振興センターやまちづくり委員会との連携が、ポイントとなることを学び、参考になった。
清水 優一郎	・市内各所に回収拠点を整備することで、市民の利便性向上と資源回収量の増加を図っている。当市においても、各地区自治振興センターや商業施設との連携による回収拠点の設置を検討する際の参考となる。 ・資源回収を単なるごみ減量施策として位置付けるのではなく、市民が気軽に集い、交流しながら環境活動に参加できる場として活用している点は参考となる。当市においても、環境施策と地域コミュニティの活性化を一体的に進める取組として検討する価値がある。

ウ その他、感じたこと等

委員名	内容
岡本 恒和	・まちの役員の負担なく運営されている。指定管理者によって課題はあるとのことでしたが、役員負担の軽減を考えていく上でこのような手法も参考になる。 ・「エコノバ」のような地域コミュニティとリサイクル拠点を兼ねた施設は、空き家活用や廃校活用の参考になる。
岡村 弘子	・循環型社会の形成に向けた取組は、多くの主体者の協力によって成立する事を改めて教えて頂いた。 ・多くの企業連携が出来る神戸市であることを教えて頂いた。神戸市のように出来ないこともあるけれど、飯田市の良さを大切に、市民とともに環境文化都市を考えていきたいと感じた。
片町 元彦	・事業として成立させる収益構造や、資源の回収から再生利用までのサプライチェーンについて、より詳細な聞き取りが必要と感じた。 ・地域住民の理解や参加を得るまでのプロセス（説明会の回数、周知方法等）は、飯田市での展開を検討する上で重要な情報である。 ・「エコノバあづま」の現地視察を通じ、実際の住民同士の交流の様子を再度確認したい。
佐々木 博子	・「ごみ捨て場」と地域交流：飯田市でのリサイクルステーションを調査している中で気づいたのは、リサイクルステーションは地域の人々と顔を合わせて話をする「交流の場」であるということ。事実、ある区長も前区長や元区長たちとの「近況報告の場」と明言していた。 ・「ごみ捨て場」と社会的処方とフレイル予防：「今後は歩いて行ける範囲にエコノバを増やして行きたい」というお話があった。。ということは、自分で歩いて動ける高齢者に対する社会的処方であるということ。。ならばフレイル予防も関係してくるのでは。 ・「ゴミを捨てる」「ゴミ捨て場」を行動経済学の視点で捉え直すことから、新しく生まれてくることがある。（ネスレの狙い）

	・企業側にとっての壁は回収の手段が整わないこと。それは自治体側が持つ既存の回収インフラで補うことができる。企業の苦手の解決は自治体の強みと掛け合わせることで、両者にとって良い事業をつくることができる。
市瀬 芳明	
関島 百合	・使い捨てカイロを回収し鉄砂を資源化する試みなどは、協働できる企業が身近にあることを利点（神戸市の強み）として運用がなされている。 ・連携できる企業は神戸市のようにはいかにも思うため、飯田市ならではの取組がバージョンアップできるという。 ・「エコノバ」は地域で運営がなされており、住民の力が必要となっている。 ・「エコノバ」の休憩スペースに、ネスレ日本が無料でコーヒーを提供して運営に協力しており、何ともうらやましい（これも神戸市の強み）。
福澤 克憲	・神戸市の「資源リサイクルセンター」（カン、ビン、ペットボトルの仕訳を自動で行う施設）については、鉄骨造 15,451 m² の大きな建物であり、人口規模の違いを感じた。カン、ビン、ペットボトルを同じ収集袋にて一緒に出せるため、ごみを出す方にとっては負担軽減となるが、ビンが割れてしまうため、飯田市の手法（リサイクルステーション）の方が良いと思う、との感想をいただいた。 ・飯田市のプラスチック資源化は、容器包装プラと製品プラと一緒にし、パレットとしてリサイクルしているのに対し、神戸市は容器包装のみに留め、より細分化したリサイクルに取り組んでいた。一方で、今回視察させていただいたエコノバは、通常の集積所との併用で運用されているため、プラ資源の全体量から考えると、企業の実証実験的な要素が高いものと感じた。仮に飯田市として取り組む場合は、市民の利便性と比較し、リサイクルの質（細分化）や量（効果）、企業の需要など、どこで線を引くか、全体のバランスを考えて、展開していくことが重要と感じた。 ・使い捨てカイロや乳酸菌飲料容器のリサイクルなど、神戸市の今後の動向を注視していきたいと感じた。
清水 優一郎	

2 かめおかプラスチックごみゼロ宣言について

(京都府 亀岡市)

【文責：清水委員】

(1) 調査概要

ア 日時 7月7日(火) 10:00～11:30

イ 場所 亀岡市役所

ウ 説明者 亀岡市議会 議長 小川 克己

議会事務局 次長 鎌江 裕 、副課長 竹村 奈緒子

環境先進都市推進部 部長 山内 剛 、課長 鈴木 長

エ 視察の目的・視点

- ・かめおかプラスチックごみゼロ宣言に至った経緯
- ・宣言を具現化するためのこれまでの取り組み
- ・全国初のプラスチック製レジ袋提供禁止条例制定
- ・事業者の協力、市民理解を得るまでのプロセス
- ・議会の関わり
- ・これまでの成果や課題、今後の体制、取り組みについて ほか

(2) 調査報告（調査内容）

ア これまでの経緯

- ・2004年、保津川下りの船頭による河川清掃活動を契機として、市民主体の環境保全活動が始まった。
- ・2007年にNPO法人プロジェクト保津川が設立され、その後、海ごみサミットや川と海つながり共創プロジェクトなど、市民・団体・行政が連携した取組が進められた。
- ・2015年に環境先進都市を目指すビジョンを掲げ、2018年に亀岡ゼロエミッション計画を策定。同年12月、「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」を発表した。

イ かめおかプラスチックごみゼロ宣言の概要

- ・2030年までに使い捨てプラスチックごみゼロを目指すことを宣言。
- ・自然環境の保全と地域経済の活性化を一体的に推進することを基本理念としている。
- ・宣言は市長と議長の連名で発表し、市全体で取り組む姿勢を明確にした。

ウ 宣言実現に向けた主な取組

○プラスチック製レジ袋提供禁止

- ・「亀岡 100 人会議」、市民説明会、市民意識調査などを通じて合意形成を図り、2021 年 1 月に全国初となるプラスチック製レジ袋提供禁止条例を施行した。

- ・エコバッグ持参率は 98.3%となり、レジ袋約 63 万枚の削減につながった。

○市民・事業者との連携

- ・「環境×芸術」をテーマとした KAMEOKA FLY BAG Project や HOZUBAG の販売、リユース食器の普及、リバーフレンドリーレストランプロジェクトなどを展開している。

- ・企業 23 社と連携協定を締結し、園芸用土や廃食油のリサイクルなどサーキュラーエコノミーの取組を推進している。

○次世代への環境教育

- ・「こども海ごみ探偵団」や学校での環境学習、企業と連携した環境教育を継続して実施している。

- ・環境出前授業を通じ、学校給食で使用するプラスチック製ストローの削減につなげている。

○ゼロエミッション・資源循環

- ・ごみ分別区分の見直しや家庭から排出されたプラスチック資源の再利用を進めている。

- ・2024 年には「Circular Kameoka Lab」を開設し、資源循環や環境に関する展示、情報発信、交流、イノベーション創出の拠点として活用している。

○市民参加による環境美化

- ・エコウォーカー事業では、約 2,840 人（2026 年 5 月現在）が歩きながら清掃活動を行い、市民参加による美しいまちづくりを推進している。

(3) 主な質疑応答

Q 非常に先進的なボトムアップの取り組みだと感じたが、地域の自治組織やまちづくり団体は、どのような形でこれらのプロジェクトに関与しているのか。

A 出発点は船頭さんや NPO によるボトムアップの活動がベースとなっている。現在は、16 団体からなる「川と海つながり共創プロジェクト」などで、住民、企業、学校などが広く関わっている。ステークホルダーを増やして議論し、皆さんに関わっていただくことを大切にしている。

Q 条例制定までの合意形成のプロセスについて、制定までに特に反発の大きかった業種に対してどのように働きかけをしたのか。

A 当初は反対の声ばかりだった。一部の業種では非常に否定的だったが、市長自ら説明に赴くなどブレない姿勢、想いを貫いた。「消費者の理解があればできる」という事業者からの声を受け、市内全域で説明会を徹底して行い膝を付

け合わせたことで、市民の7割の賛成を得ることができ事業者の理解も進んだ。

Q シビックプライドの醸成とブランド化について、肌感覚として市民の意識はどのように変わってきたと感じているか。

A 確実な意識の変化を感じている。例えば、年配の方が旅行先でレジ袋を渡された際に「環境に悪い」と言うようになったといった声を聞いている。環境教育は結果が出るまで時間がかかると感じているが、環境教育を受けた子ども達が成長して、環境に配慮したビジネスを起業する例も出てきている。地道な活動が着実に行動変容につながっていると感じている。

Q 住民の協力に対して、ポイント付与などの目に見える利益を設けるといった検討の経緯はあるか。

A かつて LINE を活用してポイントを付与する実証実験も行ったが、不正などの課題もあった。現在は成果の可視化を重視し、回収したプラスチックを配合した指定ゴミ袋で還元するといった取り組みをしている。分別の徹底がゴミ袋代の節約になるという形でのインセンティブを伝えている。

Q 多くの有名企業と連携協定を結ばれているが、市からの働きかけによるものか、あるいは企業側からの提案によるものか。

A ありがたいことに、ほとんどが企業側からのオファーで実現している。亀岡市の取り組みがメディアに取り上げられたことや宣言の効果により、亀岡なら環境ビジネスの新しい実証実験ができるという認識が広がった。人口約8万5,000人という規模で成功すれば全国展開しやすいモデルケースになると戦略的にアピールしている。市長からも「企業からの提案はまず聞きなさい、断るな。」という指示が徹底されており、柔軟な受け入れ体制がさらなる連携を呼んでいると感じる。

Q レジ袋を廃止する際に、市として何かしらの補助や支援はおこなわれたか。

A 担当レベルとしては無料でバックを配付することを提案したが、市長からはタンスの肥やしになるようなことではなく、皆が持ってもらえるものを作ろうということで、芸術とアートのコラボレーションであるHOZUBAGが誕生した。ビジネスとして自立させることを前提に立ち上げ時の支援を行い、もちたい＝お洒落のためでも、結果的に環境につながればという考えでやっている。

Q 事業ボリュームが年を追うごとに広がり加速しているが、組織体制や庁内連携のポイントを教えてほしい。

A 環境政策課12名で必死の思いで取り組んでいる。市長の着想が非常にユニークな面や、提案は断るなという姿勢が浸透してきており、いろんなアイデアが生まれてきている。オーガニックビレッジ宣言など、さまざまなことが取り組まれており、農業、教育、環境が密接に連携する体制が整いつつある。

(4) まとめ・考察

- ・2030年までに使い捨てプラスチックごみゼロのまちを目指す「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」は、自然環境の保全と地域経済の活性化を一体的に推進することを基本理念としている。行政だけでなく、市民、事業者、教育機関など多様な主体との連携を重ねながら、次世代への環境教育や企業との協働を進め、環境を軸とした地域ブランドの向上やシビックプライドの醸成につなげている点が特徴的である。
- ・また、全国初となるプラスチック製レジ袋提供禁止条例の制定にあたっては、事業者との対話や市民100人会議、市民意識調査などを通じて丁寧な合意形成を重ね、事業者や市民の理解を深めながら制度化を実現しており、政策形成の進め方としても参考となった。
- ・さらに、これらの取組を支える財源として、環境政策分野におけるふるさと納税により約4億円の寄附を確保し、各種環境施策に活用している点も印象的であった。環境施策への共感を財源の確保につなげ、継続的な取組を支えていることは、持続可能な事業展開の観点からも参考となる。
- ・「世界に誇れる環境先進都市・亀岡市」の実現に向けた一連の取組は、市民・事業者・教育機関との連携を通じて、環境施策を単なるごみ減量や資源循環にとどめず、まちづくりや地域経済の活性化へと発展させている点に大きな意義がある。当市においても、「環境文化都市」の理念のもと、市民・事業者・行政が連携し、環境を地域の魅力や誇りにつなげる取組を一層推進するための参考としたい。

(5) 各委員の所感

ア 良かった点

委員名	内容
岡本 恒和	・「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」のぶれない姿勢が市民レベルに浸透している。 ・広く多様な市民の声を聞き、想いのこもったロゴマークが制作された。庁内に入って市民の目に止まる仕掛けの数々。意識醸成に効果的では。 ・環境を軸とした他分野との連携、企業との連携によって“化学反応”によるビジネスにも繋がる新たな展開がされている。 ・中長期的プランに基づいている訳ではないとのこと。失敗を恐れず挑戦してみることの重要性。 ・「燃やす “しか “ ないごみ袋」、「埋め立てる “しか “ ないごみ袋」のネーミングセンス。「“しか “ ない」と言われると一瞬「本当に適した分別か？」と考える間ができる。
岡村 弘子	・市長をはじめ目的達成の為のぶれない姿勢や市民の参画と柔軟な発想の取組を継続して来たことが施策の実現に大きく関与してい

	ると理解することが出来た。 ・レジ袋が1か月に亀岡市で736744枚。全国1年間で300億枚使用されていた。レジ袋と環境について改めて考える機会になった。 ・河川ごみ漂流状況モニタリングによって内陸部からの発生抑制対策が重要であることが判明し、データーによる評価は重要である事がわかった。 ・「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」は市長と市民を代表とする市議会との連名であり明確な目的・目標を掲げていることが重要であると理解できた。 ・プラ製レジ袋提供禁止について、亀岡100人会議やロゴマークの制作、産官学35団体の協議会など、多くの声を聞きながら進めていった事が事業者の協力や市民理解を得ることになったと理解できた。 ・2030に向けられた、更なる夢ある取り組みに期待したい。
片町 元彦	・市長と議会が連名で宣言を発表するなど、行政と議会が一体となって政策の方向性を明確に示した。 ・全国初のプラスチック製レジ袋提供禁止条例を制定するなど、宣言を理念にとどめず具体的な条例・施策に落とし込んでいる。 ・先進的な取り組みを通じて「環境先進都市」としての対外的なブランドイメージを確立している。
佐々木 博子	・「ともに生きる プラごみゼロ」の環境ロゴマークがステキだった。 ・プラスチックごみ⇒指定ごみ袋の水平リサイクル。 ・小学生のストローがなくても飲める牛乳パックは良いアイデア。 ・エコウォーカーしたくなる、登録者へ進呈される企業と連携したグッズがステキだった。 ・亀岡市の環境の取り組みはどれをとっても「環境に良い」だけじゃない。人々の「使いたい」「持ちたい」「やりたい」という感情を上手に刺激することを考えている。
市瀬 芳明	・亀岡市では、わずか1ヶ月の間におよそ73万6,744枚のレジ袋が配布されていた実績がある。日本全体では、年間約300億枚ものレジ袋が消費されていると言われている。軽くて便利なレジ袋だが、消費される（使用される）時間は平均してわずか数分程度である一方、その後は遥かに長い時間をかけて環境に悪影響を及ぼし続けるという現実がある。亀岡市としては、この現実と真摯に向き合ってきたことを知ることができた。 ・市や活動の大きな転換点となったのが、内陸部の自治体として初めて開催した「海ごみサミット」である。そこからの流れ 2012年：第10回海ごみサミットの開催 2013年：川と海・つながりみんなでつくろうプロジェクト（川海プロジェクト）始動 2015年～2018年：環境先進都市への歩み 2015年の市長就任後、亀岡市が「環境先進都市」を目指すというビジョン・マニフェストを明示。 2018年12月13日：「亀岡プラスチックごみゼロ宣言」の発表へとつながる。

	そして今後に向けての取り組み この流れを知ったことで、使い捨てをなくす取り組みの理解が深まった。
関島 百合	・保津川の景観悪化を外国人観光客から指摘されたのをきっかけに、2人の船頭の地道な清掃活動が始まり、市民や事業者も巻き込みながら「プラ製レジ袋提供禁止条例」を制定した取り組みにストーリー性があり、納得できる背景がある。 ・「環境×芸術」でエコバッグの普及を目指す点。あのようなカラフルでおしゃれなエコバッグなら、持ち歩きたくなる気持ちを良い意味で刺激する。 ・「オーガニックビレッジ宣言」も行い、多角的に環境を考えている。 ・企業とともに、次世代の育成を目指し、小中高と広く環境教育が行われている。
福澤 克憲	・保津川下りの船頭さんの清掃活動から始まった「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」の取り組みから、「環境先進都市」への思いについて、学ぶことができた。 ・「亀岡市プラスチック製レジ袋の提供禁止に関する条例」制定に至る経過（苦労話）を、当時の担当者（現在は部長さん）から直接お話を聞くことができた。 ・プラ製レジ袋提供禁止条例をもたらした効果として、レジ袋の月利用が約 74 万枚→1 万枚に減少、エコバック持参率が 53.8%→98.3%に上昇した事例を学ぶことができた。
清水 優一郎	・行政だけでなく、多様な主体との協働により、環境施策を地域ブランド力の向上やシビックプライドの醸成につなげている点が優れている。 ・市民や事業者との丁寧な合意形成を経て政策を実現するとともに、環境政策分野のふるさと納税約 4 億円を活用することで、継続的な環境施策を推進している点が評価できる。

イ 参考となりそうな点

委員名	内容
岡本 恒和	・飯田市のゴミ（資源）袋を広報媒体として活用してはどうか。小学校 3 年生にも分かるように、楽しげなイラストをメインにゴミのゆくえ、焼却・資源化されて生まれ変わった姿、燃焼エネルギーの活用状況、ゴミがどれだけ減ってきたかなどを表記したゴミ（資源）袋を数種類作っておき、それを見るたび子供も大人も興味を持って理解と行動ができるように。次代に向け環境教育、意識醸成のためにも。
岡村 弘子	・エコバックについても「環境×芸術」の視点で HOZUBAG 開発や雇用対策に繋がり、先々の目標を大きく持ち施策を進めることが重要である。 ・年齢により環境教育の内容を変え、体験を通じて学びを深める手法が取られていた。 ・使途を「環境施策の充実」としていただけるような、ふるさと納税の活用。

	・給水スポットを市内の店舗の方に協力して頂いている。 ・エコウォーカー・エコウォーカーキッズの取組。 ・燃やすしかないごみ袋や埋め立てるしかないごみ袋の使用。 ・カインズさんと土の回収リサイクル。
片町 元彦	・議会と行政が連携して環境施策の方向性を対外的に発信する手法は、飯田市議会の政策提言や決議のあり方を考える上で参考になる。 ・条例制定に至る事業者との調整プロセスや市民理解の醸成方法は、今後同様の環境関連条例を検討する際の実務的な参考になる。 ・「ゼロ宣言」という明確なスローガンを掲げ市民の行動変容を促す手法は、飯田市の環境施策の発信力強化にも応用できる。
佐々木 博子	・「燃やすしかないごみ」「埋め立てるしかないごみ」による減少効果：これは行動経済学で考えると行動を変える“言葉のデザイン”だと思う。飯田市も範囲を拡げてぜひ参考にしたい。 ・クリエイティブ・リユースとアップサイクルの考え方。 ・無料給水スポット：飯田市の「アクアスポット swee」の活用や展開をどうするか。（ただ設置するだけでは利用頻度は限られる）
市瀬 芳明	・成果の可視化（循環） 回収したプラスチックを「地域指定ゴミ袋」へと100%製品還元し、市民へ還元する仕組みを導入。 ・ポイント付与の実証実験 ソフトバンクと共同の「ポイ捨てゴミゼロプロジェクト」でLINEを活用したゴミ拾い活動にポイントを付与。活動が激増した一方、不正投稿の課題も浮き彫りになり、今後の制度設計の教訓となった。現在は「正しく分別してゴミを減らせば、購入するゴミ袋が減る」という直接的なインセンティブを推奨している。エコウォーカー活動 ・次世代環境教育と独自のフィールドワーク（年代別の取り組み） ・発達段階ごとの学習プログラム（子どもの主体的な発案による「牛乳パックストローレス化」） ・広範なエコプロジェクト（リバーフレンドリーレストランプロジェクト、「おいしい水」プロジェクト、リユース食器利用促進シンプロジェクト）
関島 百合	・プラ製レジ袋提供禁止には業界からの強い抵抗があったそうだが、市長（トップ）がぶれずに進めた、その確固たる姿勢。 ・使用済みおむつの資源化実証や、GPS付発信機を付けて、大阪湾に流れ着く川ごみの漂流状況を調査するなど、いろいろなことに果敢に挑戦している。
福澤 克憲	・プラ製レジ袋提供禁止条例のほか、市の環境政策についての協議会において、多くの反対意見が出された。最終的にはその反対事業者の「消費者の理解があればできるのでは」という発言から、条例制定につながった話をお聞きした。理解を深める協議の場の重要性を学び、大変参考になった。 ・ごみ袋の名称を変えることにより、ごみ削減につながった事例をお聞きできたこと、プラごみの一部を配合した指定ごみ袋を活用

	していることなど、参考になった。 ※燃やす<u>しかない</u>ごみ袋（12.3%減少）、埋め立てる<u>しかない</u>ごみ袋（25%減少） ・小学校への環境出前講座をきっかけとして、学校給食でのプラ製ストローを削減するよう、小学生から企業に要望した。その結果、ストローを使わずに飲むことができる牛乳パックに改良され、今年度から市内小学校に提供されている。自らが課題と感じ、自らが取り組む姿勢、環境学習の取り組みとして大変参考になった。 ・単なるエコバックの普及ではなく、エコバックをブランド化（ホズバック）する取り組み、市民が持ちたくなる手法は参考になった。
清水 優一郎	・環境施策を行政主体で進めるだけでなく、市民・事業者・教育機関との連携を一層強化し、環境を地域の魅力や誇りにつなげる取組を進めることは、当市においても参考となる。 ・環境分野への共感をふるさと納税などの財源確保につなげ、その財源を環境施策へ還元する仕組みは、持続可能な事業展開を図る上で当市においても参考となった。

ウ その他、感じたこと等

委員名	内容
岡本 恒和	・ボトムアップから起こる取組の強さ。市民の行動が広がり、政策に反映され繋がっていく過程があるからこそその土台の強さを感じる。
岡村 弘子	・今まで活動に反対していた方の内面の変化や、ストローを使わない牛乳パックの製品化、令和 3 年からの人口動態のプラスへの周囲の変化を肌で感じ初めていく様子を伺い、確実にシビックプライドが醸成されていったことが理解できた。
片町 元彦	・条例制定後の実効性の担保（違反時の対応、事業者への支援策等）についても確認したい。 ・宣言から条例制定までの期間や、反対意見への対応経過について詳しく聞いたが、当初は反対の意見ばかりだったと聞き、やはり情熱をもって、ブレない取組が必要と感じた。 ・事業者・市民それぞれへの説明や理解醸成に要した期間・体制については、市民のプラごみゼロ宣言に約 7 割が賛成だったことが、進める大きな要素であったとのこと。事業者の反発よりも市民が後押しする事が肝心だ。
佐々木 博子	・伊那谷竹 Links との共通点と相違点：亀岡市の「プラスチックごみゼロ宣言」の原点は、保津川下りの船頭さんが川に流れ着く大量のプラスチックごみを長年訴え続けたこと。伊那谷の場合も天竜川下りの船頭さんが竹林に不法投棄されたゴミへの危機感から竹林整備を始めた。きっかけは同じでもゴミの種類によってその先の行動が違ってくるのが興味深い。 ・「環境先進都市」の取り組みは素晴らしいが、実際に市民はどう思っているのか。認知度はどれくらいか。。。が気になる。 ・市長のシーダーシップ：「なんでも受けろ」というほどの市長の強

	い意志が、現場まで浸透しているからこそ、ここまでできたんだと思う。 ・行政の力だけではここまでのことはできない。企業との連携があったからこそ。メディアに取り上げられたことで多くの企業の目にとまり、企業側から声がかかったとのこと。羨ましい限り。 ・「人々の当たり前を1つずつ書き換えていく挑戦」という担当者の言葉は非常に心に響くものがあった。
市瀬 芳明	
関島 百合	・飯田市では以前、買い物の際のマイバッグ運動があったと記憶する。買い物で複数の市内店舗を使っているが、レジの後、どの店舗でも大半の方がマイバッグに品物を入れている。 ・「環境×芸術」で誕生したエコバッグを購入したくなった。 ・亀岡市の「環境先進都市」の実現に向けて、連携協定する企業が独自に取り組みをしている。この中には飯田市に店舗を持つ企業も複数あるため、考えさせられた。
福澤 克憲	・亀岡市が掲げる「環境先進都市」は、「市民の誇り」シビックプライドを目指しているとのことをお話をいただいた。飯田市の目指す都市像「環境文化都市」も、環境への取り組みが「文化」になるまで、目指している方向性は、どちらも同じと感じた。
清水 優一郎	

3 Circular Kameoka Lab (サーキュラーかめおかラボ)

(京都府 亀岡市)

【文責：市瀬副委員長】

(1) 視察概要

ア 日時 7月7日(火) 13:00～14:00

イ 場所 Circular Kameoka Lab

ウ 説明者 環境先進都市推進部 部長 山内 剛、課長 鈴木 長
Circular Kameoka Lab 職員

エ 視察の目的・視点

- ・世界に誇れる環境先進都市を目指す亀岡市の取り組みを発信するために、2024年8月1日にオープン。多くの人々が集い、交流し、つながるための拠点施設で、ワークショップや展示会、環境学習など様々なイベントを実施しており、その方法を学ぶ。

(2) 調査報告(調査内容)

- ・コンセプトと構造：建物の表面は全体のコンセプトを反映しており、裏面は各フロアのマップになっています。2024年8月にオープンしたばかりの新しい施設。
- ・テーマ：「環境の環(わ)」と「巡る(めぐる)」をコンセプトに掲げ、さまざまな環境への取り組みや施策を展示。次世代向けの環境学習やワークショップ、地域の情報発信・交流の拠点となるイノベーション施設として整備される。
- ・建物の概要：所在地は亀岡市保津町。敷地面積は約316.65平米(約95坪)で、新築の建物としては小さめ。構造は木造だが、敷地が地上のレベルより一段低い関係で、崖地の対策として杭基礎と1階の柱を併用した鉄骨の躯体を採用している。地上1～2階は景観との調和を意識した木造建て。
- ・資材：京都の木材や間伐材、保津川の資材を活用。フローリングの木材には無垢のヒノキなどが使用されている。
- ・環境配慮設備：屋根には17.8kWの太陽光パネル、及び7.9kWの蓄電池を同時に設置。公用車として電気自動車(EV)を導入している。
- ・トライブリッドシステム：ニチコン製の「トライブリッド(EV・建物・蓄電池の3つで電気を融通し合う仕組み)」を採用。関西電力からの送電が途絶えた際にも、電気自動車の蓄電池から建物へ給電できる双方向の仕組みになっており、昼間の太陽光パネルによる余剰電力は蓄電池に貯めて夜間に使用。このニチコンのトライブリッドシステムは、亀岡の工場で多くを製造・出荷している。
- ・運営体制：月曜日が休館で、土日も開館しており、開館時間は午前9時から午後5時まで。全フロアに貸館機能を備えており、市民が自由に利用できる。

- ・4名の職員が在籍し、シフト制（役所の勤務体制としては珍しい形）で勤務している。
- ・保津川下り：穏やかな時には、近くの着船場から嵐山まで約2時間かけて下る「保津川下り」が運行されており、雨が降った後の穏やかな日には通常より急流になり、1時間半ほどで下れることもある。
- ・空間デザイン：各フロアの空間デザインは「亀岡霧の芸術祭」の組織がプロデュースしていて、かつて亀岡には芸術家のアトリエや工房が多く、移住者も多かったものの交流がなかったため、市長の発案で発表や交流の場として芸術祭が組成された。
- ・家具のアップサイクル：施設内の椅子や机などの什器は、少子高齢化に伴い統廃合・廃校となった「西河内中学校」で使われていたもので、単なるリサイクルではなく、芸術家たちの手によって「使いたくなる」「買いたくなる」ような付加価値（傷や汚れ、購入時の文字などをあえて残すデザイン）をつけたアップサイクルとして再利用されている。
- ・2階フロアの活用：ワークショップやイベント、絵画展などの展示会、ジャズなどのミニコンサート、ミニシアターとしても利用できる空間となっている。
- ・テラス席：眺めの良いテラス席が用意されており、市民からは「フォトウェディング」に利用したいという相談も寄せられている。周辺には桜の木も植えられており、春には非常に綺麗な景色が広がる。
- ・地域のイベント：平和祭にちなんで年1回開催される保津川の花火大会では、2万発以上の花火がこのテラス席から綺麗に見える。また、周辺の盆地からはパラグライダーが飛んでいる様子が見えるほか、春には競技用の気球（バルーン）の展示・打ち上げなども行われている。
- ・エコ活動と子どもの教育：園児や小学生を対象に「エコキッズ」としての清掃活動などを行っているが、大人の価値観を押し付けるのではなく、紙芝居などを通じて子ども達が自発的に環境について考え、気づくことを重視しており、実際に活動を経験した子ども達が、帰りのバスの中で「ゴミをどう分別すればいいか」を自ら話し合うようになるなど、教育的な効果が表れている。
- ・体験型展示：1階はインフォメーションエリアとなっており、展示内容を思考を変えて体験できるようになっている。鳥の鳴き声が聞こえるインタラクティブな装置があり、ハンドルを回すと、鳥の鳴き声が聞こえる仕組みとなっていた。また、水槽が設置されており、絶滅危惧種である「アユモドキ」が飼育・展示されている。アユモドキは、お腹が黄色っぽく、体にしま模様がある淡水魚で、現在、野生のアユモドキの生息地は全国でも「京都府亀岡市」と「岡山県」の2箇所しかなく、非常に臆病な魚で、普段は岩の間に隠れているが、時折空気を含みに水面に上がってくる姿を見ることができる。現在、NPO法人や行政（亀

岡市) が一体となってアユモドキの保護・保全活動に取り組んでいる。さらに保津川の端材(木の端切れ)を使って缶バッジを作るワークショップなどのスペースがある。

- ・地下1階のスペースは、川に繋がっているイメージで、濡れても良いような素材で設計されている。

(3) まとめ・考察

- ・全体を通して、この施設は単なる「環境学習」や「行政主導の展示スペース」にとどまらず、「地域のつながり、芸術、先端技術、そして生態系保護が驚くほど有機的に絡み合った、極めて現代的な地域イノベーションの拠点」であると感じた。
- ・屋根に敷き詰められた太陽光パネルや EV、そしてそれらを繋ぐトライブリッドシステムという最先端のハードウェアを導入する一方で、その核となるシステムが地元・亀岡の工場で製造されたものであるという点。
- ・さらに、資材には京都の木材や保津川の素材がふんだんに使われており、グローバルな「脱炭素」という課題を、徹底的に「ローカル(地域内循環)」に落とし込んでいる点が非常にスマートに感じた。
- ・子ども達が「エコキッズ」としての清掃活動を通じて自発的に分別を考え始めるエピソードも含め、この施設自体がひとつの「生きた生態系(エコシステム)」として機能している印象を受けた。
- ・新築としては小規模な約 95 坪という限られた敷地面積の中に、これだけの「機能(防災・環境技術)」、「物語(アート・教育・生態系)」、「地域性(歴史・保津川下り)」がギュッと凝縮されている。

(4) 各委員の所感

ア 良かった点

委員名	内容
岡本 恒和	・子供にもわかりやすい展示、情報発信・交流・イノベーションの場としての象徴でもあり、亀岡市が環境先進都市であると実感できる。 ・ふるさと納税をうまく活用している点。 ・芸術と絡めている点。
岡村 弘子	・「環る(めぐる)」をテーマにしているため、木造である事、太陽光パネル、蓄電池、EV を備えているなど多くの工夫がされていることが理解できた。 ・芸術家の手がける感性が温か味を生み出している事がわかった。 ・子どもたちの手がける手作り紙芝居が、環境に対する学びに効果的である事を通して大人が教える事でなく、自然な形で心に響く物が大切であることを学んだ。

	・自然環境こども村は、子どもたちに環境教育をしている。体験型の学習で星空や魚取るなどから自然環境に興味を持ってもらう、中長期的には子供の時の体験を大人になった時にまた行きたいと思ってもらうという2つの目的がある。 ・廃材で楽器を作り演奏するなど楽しみを作り出している。 ・8日は値札のない市場。18日は物の行方を知ってもらう。ゴミか資源か知る。28日は修理の日とし、捨てない暮らしから捨てない社会を目指している事を学んだ。
片町 元彦	・環境施策の発信拠点として、ワークショップや展示、環境学習など多様な機能を持つ施設を整備し、取り組みを「見える化」している。 ・行政の取り組みを市民が体感・体験できる場を設けることで、政策への理解と共感を広げている。 ・多くの人が集い交流する拠点として、環境施策を「自分ごと化」させる工夫がなされている。
佐々木 博子	・亀岡市の取り組み全般をみて感じたことは、各事業がステークホルダーを接続させ循環させる仕組みになっているということ。まさに環境ロゴマークそのものだと感じた。その拠点としてラボが機能していること。
市瀬 芳明	・「体験」を通して、環境問題を自分のこととして楽しめるようになっている。 ・地域を巻き込む物々交換イベントがある。 家庭の不用品を持ち寄る「めぐる環（わ）・物々交換市」のように、実生活の行動を変えるアクションが体験を通じて習慣化する工夫がなされている。 ・「ゴミ」を「ずっと使いたいアート」へ昇華させたデザイン性 一般的に地味で無機質になりがちなエコ施設のイメージを覆す、空間デザインが施されている。「亀岡霧の芸術祭」の芸術家たちの手によってプロデュースされており、パラグライダーのハギレを使ったバッグ（HOZUBAG）のワークショップなど、単なる「リサイクル」ではなく「欲しくなるデザイン」をプラスしているのが特徴。 ・地域ぐるみで「地元の絶滅危惧種」を守り、育む拠点 アユモドキの保全。生息地が全国で2箇所しかない国の天然記念物「アユモドキ」を、1階の水槽で実際に観察できる。 ・流域文化との連動 施設は保津川下りなどの自然フィールドと物理的・文化的に深く結びついており、地域や水系全体の生態系保護活動を直感的に学べるハブになっている。
関島 百合	
福澤 克憲	・環境先進都市の情報発信・交流拠点としての位置づけとなっている、「サーキュラーかめおかラボ」を現地で見せていただくことができた。
清水 優一郎	・「サーキュラーかめおかラボ」は、行政だけでなく、事業者、教育機関、市民団体などが参画し、それぞれの強みを生かしながら循

	環型社会の実現に向けた新たな取組や事業を創出する共創の場となっている点が優れている。 ・廃棄物の削減やリサイクルにとどまらず、地域資源の循環を新たなビジネスや地域ブランドの向上、環境教育へと発展させており、環境と経済の好循環を生み出すイノベーション拠点として機能している。
--	---

イ 参考となりそうな点

委員名	内容
岡本 恒和	・情報発信の場としてだけでなく、交流・イノベーションの場、ロケーションを活かしたフォトウエディングなどへの展開。
岡村 弘子	・多くの来場者があり貸館利用しているため、月曜日休みで、土日も職員の方がシフト制で4人勤務している。 ・全4年生がラフティングするなど、全市的に体験による環境教育を行っている。
片町 元彦	・飯田市が進める環境施策や環境教育の発信拠点として、同様の交流・学習施設の整備は市民理解の促進に効果的と考えられる。 ・既存施設（公民館、環境施設等）の機能を「発信・交流拠点」として再編成することで、新規整備コストを抑え同様の効果を得られる可能性がある。 ・ワークショップ等のイベントを継続的に開催する運営ノウハウは、飯田市の環境学習事業の充実にも活用できる。
佐々木 博子	・まず思ったのは、飯田市本町にある「りんご並木のエコハウス」に似たコンセプトだと言うこと。そう考えると、飯田市のエコハウスでもまだまだできることはあるのではないかと。 ・“リペアカフェ”の考え方：飯田市のエコハウスでは現在、市内事業者さんが社会貢献事業としておもちゃのリサイクル（修理含む）を無料で行ってくれている。それはそれで良いが、「修理する人・修理してもらう人」のような双方向よりもう一步進んで〈みんなでおす交流の場〉という「環る」考え方。
市瀬 芳明	・エコハウスの有効活用を考える。
関島 百合	
福澤 克憲	・次世代を担う子どもたちへの環境学習や多彩なワークショップを通じ、地域の知恵が交差するイノベーション施設として活用されており、参考になった。 ・毎月8のつく日は、「めぐるひろばプロジェクト」が展開され、①リユース事業（モノが循環する「めぐる環（わ）物々交換市」の実施）、②グリーンラーニング事業（循環をテーマにしたワークショップの実施）、③リペアカフェ事業（服や家具、電化製品などあらゆるものを修理・地域コミュニティの醸成）など、取り組まれており、参考になった。
清水 優一郎	・「サーキュラーかめおかラボ」のように、環境や資源循環をテーマとして多様な主体が継続的に交流し、新たな事業やプロジェクト

	を生み出す仕組みづくりは、「うごく。」の取組をさらに発展させる上で大変参考となる。 ・当市が掲げる「環境文化都市」の理念を具体的な行動へとつなげるため、市民が学び、交流し、実践できる拠点を設けることは有効である。環境活動をきっかけに地域内外の人材や企業を巻き込み、新たな地域価値の創出や関係人口の拡大につなげる取組として参考となった。
--	--

ウ その他、感じたこと等

委員名	内容
岡本 恒和	・職員の皆さんが「大変です！」と言いつつも「楽しそう」に仕事をされていることが表情、言葉から感じられた。 ・亀岡市はどちらかというと「京都市の隣でシュンとしていた」そうですが、環境の取組で地域への誇りを持つことができた、ブランド化され、人口社会現象も反転したとのこと。とても素晴らしいことだと思う。
岡村 弘子	・環境を考える時に、そこに自然があることは重要だが、それを楽しんでいる大人の存在が一番の自然教育なのではないかと感じた。
片町 元彦	・施設の運営体制（人員配置、運営費、指定管理の有無等）や、開設後の利用状況・効果について確認できたが、利用料が発生するため、どれくらいのレンタル料が支払われたのか確認したい。 ・2024 年開設と比較的新しい施設のため、今後の運営上の課題や改善点についても、もう少し踏み込んでお聞きしたかった。 ・亀岡市の 2 つの視察先（プラスチックごみゼロ宣言とラボ）の連携関係についても整理して理解したい。
佐々木 博子	・“めぐるひろば”の考え方：〈8のつく日はラボの日〉仕掛けは練りすぎてもいけない（仕掛ける側の自己満足・市民がついてこれない）が、仕掛ける側の意図に乗れる乗りやすいように、上手に流れをつくるのが大切。 ・コンセプトと仕組みは非常に練られたもので事業としては素晴らしいが、実際に市民はどう思っているのか。利用者数や認知度、シビックプライドにどこまで影響しているのか。は気になるところ。
市瀬 芳明	
関島 百合	
福澤 克憲	・環境先進都市推進部と教育委員会が連携し、所管横断的な取り組みとなっていると感じた。
清水 優一郎	